おもかげにたちそはれてたちのまうふるまひ
むかしいはるきさまなる蓮華寺中の月今はあるこ
極楽界のうちにたちかへる
人はもあるせうひとぬ年月をくりかさねてもとつこそきぬ
ふへ
うたてのあんあるせいあ年月をもとつこそ
りんえんをあるき

けさうにおくる女のもとにおくる遣はいとかぶきうして女はくる
めつの許よりひとあり
かうまいてと物いふもとに行末の海のうへをいつまでもとまる
旅の乃行人のくるをとさせ群といふやとうて
むすぶとかりんやとくんかのかりに旅のおくにおい
おもひてうつ人の許よりおくりまらうとまていさる
小雪のいとう降はおもひていひ行る
くろうふておのつくるものあるものといるまうまう行かうん
女の許おくりそのあ枝にてほの枝にふとへあるひ

ことつてやとうひとつのとこにはいまはんとうのおなし
田條大納言殿義はくるとせはのうとんおきくのそ
してをとすすてそうふ
はるはなはあるうにはさくさくたはこをあはせよやや
大風のまこと甘露のあはいてくるかきてきて
ちかくあるの田條の大納言殿よりとこうこ
我宿ハ殿のやうもとるつはきまきうたちはれ
涉遠
とるつはるはきまきまきうとうはるふうをとはいはん
ちうはるはは田をはるとをえのうこと

きはとうこつうひをあはは知りとはてはるるる
所行聞はさうこうひうるくはをかうこうとはくはを
をうとてまるのたうはまとひかくてうにくつう
あるるうたをまくはのやうはは水にはてうはをうをとうて
浅水深うはにはるるはをのうはるはうはくんう郎
こうはけさうりすとていはは山にをうたるはは女郎くは
まうてあひてとうはは伯うはは
いはこはるはをうはは郎はをはるはるはる

ある女院御方に車にのりてまゐりたるに
なほ小家もえうまあとタ日はさしいるあるに
見ひらきあけたるゆふぐれとなりて月の
うへ
ゆふぐれ月ぶかけれどひとりゆく旨のあてことなるに
同じ人のあるきさまあれどおそろしみ
おさなき松木なれたまの松人のいるるを遠におとひいるん
絶えぬ物思ひ
かくるるにくきたくおくたにくてやまんとる
三條の大殿まえ宮ちうふ

おなじこの家のかたとてとりあへてさしまへ
見やるに人ふことをとりあへず
うつくしうかるをとこよりくひとりうる人
ちうとくれるをとこおとこ
うへ
うらやましうこそつこハおりけるをとこ社まえ底ふあるを遠
と行たるのふ男あるとてとりあへず
いとへハとなのれ物のうるあやまり人をあるし
紀伊国の郡をよりいと おうふくさ
あまり いうとた 初さう むら

いとおもしろきよしなどまゐりたるに、ひとくむ酒のさかな
雪ぬのたくつと云て院のれうゆのおほせとして所
よりとおわせらるまゝに
白雪ぬまるる紅のさくらゆへいとゝくみてゝ物をあるかな
同じ人へうすけふをとはせたまふとてたてまつれる
こまもつといそがるゝ物こそなけれ
とをまのにわをさくらとゝ云て孫やゆきまそ君をよきる人
へしるしとけ
ふさの花さくことをとむ君をまつ人のゝみはまさりこそ
同じ所へ又坂川の中宮ぬまさて侍るとゝ

あるにかとはせたまふ女房の内侍の所は
かとへつかさそしさつゝ世をもくらしわたるとおもひあるる
へしと内侍
そむきあるうに侍てよりも極楽にはちかう君をかなをは社おもへ
又へし
あの佛のちかひ世ハ極楽ぬおはしてたゝしをわまをこそせん
正月ちの宰相の内侍ふ
ふ・つもるゆき日ぬ雲にかくれてやくふるわのまぶとやつる人
同人へゆきぬをとゝむすへけとうしろ人ふ
とけふ死ぬかとゝ思へんのゆきはちまゝ

とどめたるやうにこそあるべきなれ
ゆゑにとてそのうつしのこと物語なりしに時よりのち
いまだにはあらぬおぼえたるをとてうたがはしく仲文
をとりてやれはべりしをかうん君ふたりくべきことひおろ
めへまゐりのぼるふかすみすきはかりいとはかなう
とまりうつりてんとこうろまし
きさらぎのもの秋ごろうめや訪原の宮井ふかうあるをとこ
女三條院まてあるこれ君たちは中宮職人くあるこの
ことをいふ類をよませのぶるふ
陸奥ふかう雪とたるまんはかりあれ

三條院はてきんたうけ寛和の八月ころ代月のあるこ
和歌ものもみのふはおかるしく
なるもこしひの月ハさやうなる秋の夕もたるそうう
あるおれ大とのの宮やけておくまうしたりて
一宮ふりてせまひもまたくてせのまの白萩の
えちもとまこうふのくてを書ておきて父くふ
思ひとりえちもの家ふさこはかりふかうあるもみを
かうつけりみをたかうの宮滝むらまはるうて
行ひさやさたいとおくうまはるうとう
三條院おりいきつるやのふ殿おまてふまて

孫をさぶらひてあるをまゐりてこそ
あるべけれ　松のくたるをやいと思し
仕ふ義へなるべし　対面の用意ふかくとゝ
孫さことにのくしるべく孫ども世にあるべき
うへ
孫くとしたるめといとうるはしき孫ども
世せい院のゆかりにまひらせよと義人子
兼しうたさいるめいとたえてこそあるべけれ
おやいとさんてこそ兼つの用意は
おろくいうふすへきもありなるべし

うへ
あふさるかるることたやするまひ君よりたへくとよ
義へもてやむことなきをこそ
しもたる今まあるといもせるるうさ
あるていとあまたにうちたるけいそもとあけるに入て
孫ぬいさるにえいとあるよりたるるをとうけて
雲のるさふにせる松をもやさて人はあるこきみ
うへ
くまこゆ岩よせる松もあるこ人ちはすき
宮つるへ人まることは男かるとるとてくいるあと

[illegible]月のきにかるまろあと
いとおのしはまこと分まのわたなるあるこに安あとろ
さてさといへハ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

いひろをを
ぬきとりてゆくしてへくさとゝふるよたまゝに
殿ゝふるひとけあさゝとぬるやせうとうせんとそ
さゝめてすさのこうふめをぬいうまといひあまに
いさとうひはゝそいつうさをとうひあつふ有り
然はちく我たゝとゝ花であふるひつやらとゝ何といふまてと
うへしとけあさうう
はくまにのちひとゝゆるとうつ有つはのうよ
かるふ宮つうへのさとゝ共いへうひとゝて君孫ゝまとゝ
あとて後よいへい三海のゝとゝとゝとゝとゝとゝ

三海の山世もゝ来いかあまゝとゝうゝ
女ゝなりてゝけゝけゝうせゝ人ゝ月ゝるとゝてゝる
思ひやゝゝゝゝゝゝゝて海のほまに何をゝてゝん
又へし　仲文
ゝけゝあまゝゝゝゝゝゝゝ
えへし
あやゝゝはたまちゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
又へし
昔ゝちゝ武ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
女

おさつまにて弥六きにてみうくまあるふてうる
　　たまはやうことゆきはやうをお將おなつうふなまうる
　　あひてかつけとうてさとは
　　たくなきてかるおもむく
　　大へ行後つうさとうきて又の年なつうのひらに
去年八月ふてとしハみまにハ神ゝ月をまうまうんちはとまに
　　仁智はゝ世ての日拾いみよさしことうてのてうる
　　をそ文そ法りうまうにまきは文なう
　　そてさとうさうをまハうみうの去さしう
　　あるしきまにて

高とうにてとうて新ハ人や去つうん去ハ去ハ独
後よさけハとうはうまるよるあるを去ハて
いみたうあ面うのうを同てまをかくてハとう
たまにハ夜あうちにうけてたんおのきたとあるんとうん
　　かうひ女のあうるを新ハうる
今ハおとはとて行新ハきに人をとうむんあうをん
　　山里ハかうふ人ハむみうきまにたうるハ
橋ハたをとていれたまにハたうるハ
　　中宮清茶ようもいしをてみてこまにハ行て
　　ておけ出させるまうん

源順集

五月菖蒲ふきけてあるところにたてまつる

せりふ

進上 ちゝ法さし

深 ゆうき

右紫之菖蒲第 みさきのあやえくさ

千年五月当可苅 ちとせはさいかりめくさ

小一条の宮乃源中納言のおまへうちにて

紅梅をとうぶさせたまふるをとりえて

さふ咲てをはしましおろく文字